# 地域スポーツ文化の発展に関する研究~新潟県の事例から~
# A study about the development of the regional sports culture ~On the case of Niigata prefecture~

1K06B110　　佐野　裕文
指導教員　主査　石井昌幸先生　　副査　寒川恒夫先生

【はじめに】

1946 年から始まった国民体育大会は、全国各地のスポーツインフラ整備という観点において非常に大きな役割を果たし、地方のスポーツ文化発展に影響を与えた。さらに、93 年のＪリーグ誕生、そして 2002 年日韓ワールドカップ前後から「地域密着型」のクラブマネジメントという概念が注目され始め、首都圏ではない地方都市においてもスポーツを「する」「みる」「支える」という環境が整いだしていった。本研究では、こうした戦後の日本スポーツ発展史を、特に地方都市の視点から研究することとする。研究対象都市を新潟県とし、スポーツ環境の整っていなかった地方都市のスポーツ文化が、時代の流れとともにいかに発展していったかをみていく。

【第１章】

第１章では、新潟県の特徴を語る上で重要な「裏日本」概念の形成過程と、新潟県のスポーツ事情について概説する。北陸・山陰の日本海側諸県のことを指す「裏日本」という概念は明治初期と高度経済成長期に特に意識された。「裏日本」概念は新潟県民の精神にも大きく影響を与え、スポーツ面においても後に影響を残すこととなった。

【第２章】

第２章では 1964 年の新潟国体を取り扱う。高度経済成長期に行われたこのイベントは、新潟県内のスポーツインフラ整備面で大きな役割を果たすとともに、県民のスポーツに対する意識を大きく高めた。官民あげての周到な準備によって天皇杯・皇后杯ともに１位を獲得したが、選手強化方法に問題があり、教育面にも弊害を残すなど国体の歴史としても注目すべき大会となった。

【第３章】

第３章では 70 年代前半から 80 年代後半までの新潟県スポーツについて見ていく。この時期には国体の効果も薄れており、新潟県スポーツは全国舞台で目立った活躍を果たすことができない低迷期に入っていた。ただこの時期は、高速道路や新幹線などの高速交通網の整備が行われた時期で、都市の近代化という点では非常に重要な転換期になった。

【第４章】

第４章では、90 年代前半の鳥屋野潟公園都市計画の中での新潟スタジアムを中心としたスポーツ施設建設を巡る動きと、2002 年日韓ワールドカップ招致・開催までの流れを追った。サッカー文化の根付いていない都市が、いかにしてワールドカップ開催地決定にまでこぎつけ、イベント成功を収めたのかを検証した。ワールドカップ招致にはそれまでマイナスイメージだった「裏日本」という地域性がプラスに作用していたことが明らかとなった。

【第 5 章】

第 5 章では、アルビレックス新潟の発展から第 64 回国民体育大会（トキめき新潟国体）の開催までを扱った。新潟県にスポーツ文化と呼べるものが根付き、県民のスポーツ熱の高まりが如実に現れた時期である。県民の長年の悲願であった県立野球場が 2009 年に完成し、今後の新潟県スポーツ界は新たな時代に入ることが予想される。

【終わりに】

新潟県は太平洋側諸県に比べ、近代化の立ち遅れた時期があり、それはスポーツの面でも同様であった。しかし、都市の発展とともにその傾向は改善されていった。新潟県のスポーツ文化が大きく発展したのは、ワールドカップ招致やアルビレックス新潟の成功といった要因があるが、その背景には、新潟県のスポーツを盛り上げようとする多くの人々の信念があった。それは、一過性のイベントに過ぎなかった第 19 回国民体育大会のときの様子とは明らかに異なるもので、将来的な新潟県スポーツ界の発展を見据えたものだった。